

第 1907 回 定例研究会報告要旨(12月3日)

## 戦後から現在までの我が国の食品の安全に関する事例とその変遷及び特徴

佐藤 京子

### 1. はじめに

食品の安全についてのリスク管理およびリスクコミュニケーション(RC)のあり方を検討するため、我が国の食品の安全に関する過去の事例について、消費者団体の活動記録や文献等から収集し、社会的な関心の度合いを調査し、各事例の特徴付けを行い、どのような事象に対して国民は強く規制を求めるのか、RCを進める上での留意点は何かなどの視点から検討を行った。

### 2. 方法

主婦連合会機関誌、厚生白書等から事例を調査し、国会会議録検索システム、日経テレコン 21(新聞記事)の各DBを用いて、各事例に関連するキーワード検索を行った。次に、(1)単発事故か継続性があるか、(2)主な原因が食品(農産物)の生産段階か加工流通段階か、(3)環境汚染由来関連か、(4)新技術導入関連か、(5)死亡者が多いか、等の観点により分類した。さらに、(1)は、食品製造企業の人為的ミスによる単発事故、一定期間問題化後、使用禁止措置や十分な対策等が取られ終息したと考えられる事例、それら以外の環境汚染、微生物性食中毒、新技術導入などは、対策がとられているが、問題は継続する可能性がある事例、(2)は、圃場で散布される農薬、農用地の環境汚染、家畜の飼育など農産物の生産段階、食品添加物、食品保存関連技術、微生物性食中毒、工場事故など食品の加工流通段階、に関連する事例に細分類した。

### 3. 結果

52の主要事例について国会会議録検索シス

テムを用い、ヒットした委員会等の合計数の多い(関心の高い)順に並べた。関心の高い事例は、環境汚染(公害)が原因の「水俣病」、  
「PCB」等や、新技術導入に伴う「BSE」などであった。微生物性食中毒は「O157」を除き低位に、戦後2,000名以上の死亡者を記録している「フグ中毒」も低位であった。日経テレコン 21 への記事収録は、20 年未満であるが、一部の事例を除き国会議事録検索結果と似た傾向が認められた。分類された事例の社会的関心の高さを見ると、(1)の「単発事故」、(1)の「一定期間継続後終息」、(2)の「加工流通段階」に分類された事例は、両DBともに低位であり、他に分類された事例は上位であった。

### 4. 考察

国会の機能は、リスク管理の観点から法律など規制のあり方を論議する場であることから、社会がリスク削減を強く求める事象である「環境汚染」等に分類される事例について活発に論議が行われている。一方、死に至るリスクであるが「フグ中毒」のように自己回避できる事例の論議は活発ではない。自己の意志である程度リスク回避が可能な微生物性食中毒についても同様である。一方、関心の高い「環境汚染」、「新技術導入」等は自己回避が困難であり、科学的にも十分に解明されていないリスクであることから、食品安全に関するリスクについても、「恐ろしさ」、「未知性」の2因子から構成されるスロヴィック認知モデルはよく適合するものと考えられた。この認知モデルでは、これら2因子が高いほど規制によりリスク削減を望む程度、即ち行政への期待が高いことが明らかとなっている。

以上の結果から、リスク管理の場としての生産段階の重要性、積極的にRCを進めるべき分野、「未知」や「恐ろしさ」を払拭するための科学者の研究活動、さらに、RCのパートナーとしての消費者について考察した。